

The Iris Murdoch Newsletter of Japan



No.15

February, 2014

会長就任のご挨拶

塩 田 勉

今年度から、会長を勤めさせていただく塩田です。

これまで平井会長、橋本・榎本副会長、大道・大槻監事、岡野事務局長、それに理事の方々が、学会を支え、立派に運営されてこられました。小さな小さな学会ですから、財布もかぎりなく小さく、人の手も数えるほどしかなく、志のあるわずかなの役員の方々の肩に、雑用がずんとおしかかり、みなさん、ご苦労なされてこられました。ありがたいことです。私にどれだけ、後が勤まるか分かりませんが、出来る範囲で、みなさんに協力していただきながら、努力していきたいと考えておりますので、ひとつ、よろしく。

学会員が、一定の年齢以上に達しますと、子供が登校拒否したり、いじめられたり、就職がきまらずニート化し、引きこもったまま家事の一つも手伝わないとか、高齢化し、認知症を発症して、だんだん、人格が崩壊していく親と付き合いながら、研究やら教育やら校務もこなさなければならぬ、とかいって苦労が出てきます。さらに年齢を重ねて息子や娘を完売して、孫が生まれたりすると、研究のかたわら、孫の世話やら、キャリア・ウーマンのお嫁さんや娘さんに代わって、育児婆やら育児爺もせにゃならぬ。高血圧だの癌だの糖尿病だのと付き合いながら、だましまし仕事をするようになる。ままなりませんね、人生は。親

の苦労がしみじみ分かって、ガキのころフンと思っていたシェイクスピアの『リア王』などが、深刻な老人問題劇であった、なんてことも身につまされる年齢になる。そんな、悠々自適とはほど遠い生活を送っておられるお仲間もけっこう多いのではないかと、愚考いたしております。

そんな状況の中で、学会開催場所決定、発表者募集、ニュースレター原稿確保、発送、学会費集金などなど、人手のある学会なら普通にこなせる業務が重荷になる過疎化研究領域の学会であれば、今まで役員の方々のご苦労は、並大抵ではなかったに違いありません。

これまでニュースレターの面倒をみていただいた大道千穂さんからもこう伺いました。マードックにまつわるエッセイの執筆の承諾を取ろうとされても、「マードックを読んだことがあるという人がそもそもとても少なく、読んだことはあっても好きになれないですとか、つまらない、といった意見が圧倒的に多く、毎年、寄稿をしてくださる先生方を探すことにとっても苦労し」、「7人8人と断られ続け、だんだん、自分はそんなにもつまらない作家を研究しているんだろうかと、研究そのものがいやになってきたほど」だったんだそうです。これは、半端なご苦労ではありませんね。会長就任前に、その話をうかがって、ひゃー、大変だ！と私は、少々、びびりました。これは、み

なさんのお知恵を拝借しながら、なんとか工夫して乗り切っていかなければならん、と覚悟した次第です。ご協力くださいね。

まあ、難しい話なんですけど、会員を増やす工夫、マードックに内在する、現代における意味を掘り起こし周知する工夫、メールなどの使用によるニュースレター印刷・発送費の軽減など、緊急の問題に創意と発明をもって対処しなければなりません。ホームページも経費を業者にむしり取られない運用方法を見つけ出す必要があります。いずれも難題ですが、みなさんといっしょに、解決の糸口を見出したいと思っております。とりあえず、みなさんをお願いしたいことは、次のことです。

事務局に、メールのアドレスを教えていただけませんか？ プライバシーの問題がある場合には、捨てアドを、gmail. かなんかでこしらえて（作り方は伝授します）、それをお知らせくだされば結構です。そうすれば、ニュースレターの電子化で郵送料を削減できます。メーリングリストを作らなくても、bcc を使って、他の会員にご自分のアドレスを知られることなく、メールやレターをお届けできますので、是非、ご協力なさってください。

もうひとつは、少し政治的な文脈に触れてくるのですが、秘密保護法や武器輸出、靖国参拝などを、極めて、強引に押し進める昨今の風潮には、マードックの小説に頻発する、オウム真理教的小共同体とプチ・ヒトラー型人物の繁栄と崩壊のテーマが絡んでくる、という認識をシェアできないか、という件です。マードックの時代的洞察が、はからずも現代日本の状況を予見している、彼女の諸作品から、日本を毒しつつある政治状況を批判的に見る知恵が読み取れる、そういう時代に、私たちは、はからずも立ち会っているのでは

ないか、と私は感じるのです。文学作品の意味は、こうした時代変化に触発され刷新されていくのではないかと考えます。

現代日本には、見たくないものが溢れています。年金が破綻するとか、温暖化による異常気象とか自然破壊とか、原発問題とか、武器輸出とか、全国民が見る勇気を失って無力感に陥っている難問が山積みです。そういうときは、少しでも頼もしく見えたり、ありがたく見えるものに、人々は、無批判にすがりたくなる。国の負債が空前の規模に達する危ないアベノミクスでも、イワシの頭も信心からと、ご利益にあずかりたいと思う人々がすがりつき、うかうかプチヒトラーまで受け入れてしまう。そういう人間の姑息な自己保存要求の上に栄える独裁主義の行き着く顛末を、マードックは繰り返し描いているように私には思えます。まあ、そんな認識を、今、共有できれば、マードック研究に新しい展望を開くことができるのではないかと考えるのですが、どう思われますか、みなさん？

できれば、そうした新しい洞察を、学生さんや市民のみなさんに共有していただくために、マードックのテキストを教室やカルチャー・センターなどで使って見てはいかがでしょうか？ そこから、若い研究者予備軍、あるいは、マードックに関心をもつ市民読者が育っていく可能性もあるのではないかと、思うのですが。こうしたマードック理解が、連れ合いや、兄弟や、子供や孫たちを、戦争や紛争の犠牲にしない、という遠い理想に繋がっていく、そうした可能性を、もっと広く理解していただけるよう、マードック研究者は努力してもよいのではないかと、考えています。

まあ、江戸っ子で気が短いもんで、いろいろ粗忽なことも言ったりやったりしかねませんが、ご容赦の上、ひとつよろしく願います。